

関西大学文化交渉学

ICIS NEWS LETTER

ニューズレター



CONTENTS

- 東西学術研究所 所長挨拶 —文化交渉学研究拠点に関して—
- ICIS 国際シンポジウム
「唐代音楽の復元—東アジア古代音楽研究の最前線—」
- 東アジア文化交渉学会
第17回国際シンポジウム開催報告
- 内モンゴルでの学術交流

東西学術研究所 所長挨拶

関西大学東西学術研究所は、1951年（昭和26年）の設立以来、70年以上にわたり、東西両洋文化の学術研究、殊に比較研究を通じて、世界文化の融合に貢献するという高い理念のもと、学際的かつ越境的な研究を推進してまいりました。その成果は、国内外の研究者ネットワークを通じて広く共有され、今日では東西学術研究の一大拠点として、世界にもその名を知られる存在となっております。

学問の国際化・多文化が進む現代において、本研究所の理念と実践は、時代の要請に先駆けてきたと自負しております。特に、2007年から2011年にかけて実施された文部科学省グローバルCOEプログラム「文化交渉学教育研究拠点」では、文化交渉学という新たな学問体系の構築を目指し、従来の専門領域の枠を超えた横断的な学知の形成が図られました。その成果をふまえて、2012年、本研究所に文化交渉学研究を推進する「文化交渉学研究拠点」を設置し、グローバルCOEとしての研究機能の継承・発展に取り組んでいます。また、「アジア文化研究センター」（CSACII）、および2017年に設立された「関西大学アジア・オープン・リサーチセンター」（KU-ORCAS）は、文化交渉学研究のさらなる深化と広がりを促し、本研究所の研究拠点として展開しています。

現在、「文化交渉学研究拠点」には3つの研究班が設置され、国際的かつ学際的な研究を推進しています。

まず、「東アジア言語資料研究班」では、「漢字・漢文文化圏」および「言語接触」を共通のキーワードとし、日本・朝鮮・中国の漢字資料を中心に、欧米の域外資料も参照しながら、言語文化の交差と影響の諸相を探求しています。これにより、異なる言語が互いにどのように交渉し、表象されてきたかを、個別資料の精査を通して考察し、「共有の位相」の解明を目指しています。こうした研究は、文化や知の伝播・変容のあり方を理解するうえで極めて示唆的であり、現代における言語的多様性とその背景への洞察にもつながるものです。

次に、「近世近代大阪の漢学・芸術研究班」では、大阪を拠点に漢学の伝統を育んできた泊園書院を中心とし、その歴史的・文化的意義を解明することを通じて、近世から近代にかけての大阪の学芸・思想・社会構造の変遷を明らかにしようとしています。泊園書院の歴代院長

—文化交渉学研究拠点に関して—

たちは、徂徠学の正統を継承しつつ、時代の中で新たな学問的展開を遂げ、近代東洋学の萌芽にもつながる貢献を残しました。この研究班の活動は、地域文化と学問の相互作用を読み解き、関西大学の学術的ルーツを再認識することにも資するものであり、地域社会との連携や市民的学知の形成にもつながっています。

そして、「王権・秩序とアジアの宗教研究班」は、アジアにおける国家形成と社会秩序の構築に宗教が果たした役割を多角的に分析しています。仏教・儒教・道教といった宗教思想が、王権の正統性を保証し、国家統治の思想的・制度的基盤となってきた歴史的事例を収集・比較しつつ、宗教と政治権力、民衆との関係性に焦点を当てています。とりわけ、宗教が秩序形成の支柱となると同時に、時にその秩序を揺るがす原動力ともなるという逆説的な側面をも考察する本研究は、宗教の持つ重要性を捉える試みといえるでしょう。

これら3つの研究班は、それぞれが個別のテーマに立脚しながらも、いずれも「文化交渉」という本質的な課題に取り組んでいます。異なる文化や宗教、言語が出会い、時に摩擦を生み、時に融合しながら新たな価値を創出していく——そのダイナミズムを明らかにすることは、現代のグローバル社会において避けて通れない課題であり、本研究拠点の存在意義はますます高まっています。

また、本研究所では、大学院生や若手研究者の参画を積極的に促し、準研究員制度を通じて次世代研究者の育成にも努めています。国内外の研究者ネットワークとも連携し、成果は「東西学術研究所紀要」や研究叢刊、資料集刊などの多様な形態で発信されています。

今後も文化交渉学研究拠点を核として、多様な文化・言語・思想が交錯するアジア世界を広い視野でとらえ、学問的・社会的に有意義な知見を生み出す場としての役割を果たしてまいります。研究所員一同、引き続き、皆様のご理解とご支援を賜りながら、新たな学知の創出に邁進していく所存です。

（関西大学 東西学術研究所 所長
アジア・オープン・リサーチセンター長
二階堂 善弘）

ICIS 国際シンポジウム

「唐代音楽の復元——東アジア古代音楽研究の最前線——」

2025年12月21日午後、関西大学千里山キャンパス以文館4階セミナースペースにて2024年度関西大学文化交渉学拠点（ICIS）国際シンポジウム「唐代音楽の復元——東アジア古代音楽研究の最前線——」を開催した。

日本雅楽は平安時代の宮廷社会で完成した、日本で最も古い由来を持つ音楽である。それは唐楽・高麗楽・国風歌舞の三種を源流とし、特に中国・唐朝から伝来した音楽こそ唐楽として日本雅楽の中核となっている。唐代の音楽の実態を示す文物および資料は、中国では一部の楽譜・楽器や壁画としてのこっているだけで、むしろ日本にこそ中国より多く現存する。特に正倉院楽器は唐代音楽の実態を彷彿とさせるものであり、また現在継承される雅楽は「生きる正倉院」とも言われる。従って、中国の音楽学者も唐代音楽を復元する場合、日本雅楽や正倉院楽器を研究しなければならず、また日本の音楽学者も奈良・平安の音楽を復元する場合は、中国の音楽学研究成果を参照しなければならない。この研究領域はまさしく文化交渉学的特性が最もよく現れていると言えるだろう。

今回招聘した趙維平教授は大阪大学で日中音楽交流史を研究し、現在は上海音楽学院で唐代音楽の復元を中心とした研究に従事している。特に、2022年に唐代音楽の復元コンサート「絲綢之樂：唐韻回響」を開催した。その際には、日本の正倉院楽器をもとに当時の楽器を複製し、中国・敦煌で発見された琵琶の楽譜および日本に伝来する古楽譜をもとに当時の楽曲の復元演奏を試み、さらに敦煌壁画に残る舞楽図から「胡旋舞」を復元上演した。そこで今回のICISシンポジウムでは、趙教授に「唐楽再構築の基礎とその可能性に関する研究」と題し、この復元コンサートが企画・実現した学術的経緯について講演していただいた。そこでの「中国は東アジアの古代楽譜の発祥地であり、唐代の楽譜の多くは遣唐使によって日本にもたらされ、伝承されてきた。日本に伝存するこれらの古楽譜は間違いなく日中両国の古代音楽の復元に重要な意味を持っている」との発言は極めて重要である。

続けて登壇した李西林教授は、長く西安音楽学院において中国古代音楽・伝統音楽の研究に従事されてきた方である。今回の「唐代音楽の繁栄への過程とその歴史的価値」と題する講演では、唐代音楽研究のために必要な資料・文献について具体的



趙維平教授

に紹介された。李教授は最後に西安鼓楽に言及された。今に伝わる西安鼓楽は唐代以来の古い音楽を保存していることで知られ、李教授は、西安音楽学院を卒業して現在は本学大学院東アジア文化研究科で学ぶ学生とともに西安鼓楽の一曲「満庭芳」を歌い、この曲のメロディが日本雅楽の曲と似ていると指摘された。日本雅楽こそ唐代音楽が日本に伝わったものであり、唐代音楽を現在に伝える西安鼓楽とのあいだに共通するメロディが確認されたことは、今回のシンポジウムのねらいをもっともよく現していて感動的であった。今後、このような日中間の双方向的アプローチがさらに発展し、東アジア古代音楽研究に新たな地平を開いていくことを期待したい。

(近世近代大阪の漢学・芸術研究班 主幹 ICIS 拠点リーダー
長谷部 剛)



李西林教授



長谷部剛教授

東アジア文化交渉学会 第17回国際シンポジウム開催報告

東アジア文化交渉学会第17回国際学術大会は、2025年5月10日から11日にかけて、浙江省杭州市にある浙江工商大学下沙キャンパスで開催されました。会場となった浙江工商大学は、1911年に設立された「杭州中等商業学堂」を前身とし、1980年に「杭州商学院」、2004年に「浙江工商大学」と改称され、浙江省人民政府に属し教育部と商務部が共同で運営する地方重点大学です。商学・経済学を中心に発展してきた総合大学であり、これらの分野において国内外で高い評価を受けています。「誠信・篤実・勤勉・革新」を校訓に掲げ、理論と実践の融合、国際的視野を重視した教育と研究を展開しています。

本大会のテーマは「地域研究の視野における東アジア文化交渉」で、東アジアにおける漢字文化圏の共通性と、各国が歩んできた歴史的背景を踏まえた知識の移動や融合に注目し、10の分科会が設置され、総勢約250名の参加者があり、地域研究や言語接触、文化交渉、宗教、翻訳、留学生、デジタル・ヒューマニティなどを中心に、活発な議論が行われました。

本大会の主催を務めた浙江工商大学東西文明互鑑研究院は、「立足浙江，放眼东亚，走向世界（浙江省に立脚し、東アジアに目を向け、世界に発信する）」という理念のもと、文化伝播と歴史的脈絡



を重視した研究を推進しています。中日文化交流、筆談文献、近代留學生の研究などの蓄積をもとに、地域研究のさらなる深化に取り組んでおり、本大会はその成果を広く共有する貴重な機会となりました。

なお次回の第18回大会は中国福建省の福建師範大学海外教育学院で開催される予定です。



(関西大学名誉教授 東アジア言語資料研究班 客員研究員 内田 慶市)

大会テーマ「地域研究の視野における東アジア文化交渉」

◆分科会テーマ

1. 地域研究と東アジア文化交渉
2. 東アジアにおける近代知識形成史の研究
3. 東西の宗教と東アジア文化交渉
4. 近代留學生集団の研究
5. デジタル・ヒューマニティと東アジア文化交渉の研究
6. 文・史・哲など近代の知識移転と東アジア文化交渉
7. 東西・東西言語接触、翻訳と訳語の研究
8. 東アジア海域における人的・文化的交流と文化伝達に関する研究
9. 魯迅と東アジア文化交渉
10. その他の東アジア文化交渉に関する研究

内モンゴルでの学術交流

2025年6月28日から7月5日まで、中国の呼和浩特市にある二大大学を訪問し、先生方や大学院生諸君と交流する機会を得た。内モンゴル師範大学ではモンゴル学院にて「江戸時代の日本における中国言語文化の受容—唐話から白話へ」（発表言語は中国語）というテーマで講演を行なった。また、内モンゴル大学では「江戸時代の漢語学習と日本人の漢語観」（発表言語は中国語）というテーマで講演を行い、本学東アジア文化研究科の修了生である石永峰（文学与新聞伝播学院専任講師）と共に、石先生が準備された詳細な資料を用い関西大学及び東アジア文化研究科の紹介を行なった。講演と紹介の後には、いくつかの質問を受け、短い時間ながら充実した訪問であった。両大学のそれぞれから、今



後日本の大学との交流や協力を深めていきたいという姿勢を感じた。

また、内モンゴル

師範大学図書館「古籍文献部」の書庫を見学することができた。内モンゴル大学図書館では館内と貴重書庫を見学し、モンゴル仏教の



版本をはじめ、貴重な書籍を観覧した。

両大学の先生、学生達との交流や、呼和浩特市市内での散策を通じて、呼和浩特特有の普通話（“呼普”）やモンゴル族の風格をもつ普通話等、現代中国語の多様性に触れることができたことも、今回の訪問の大きな収穫であった。

(東アジア言語資料研究班 主幹 ICIS 拠点サブリーダー 奥村 佳代子)



泊園書院開設200周年記念行事の開催

今年2025年、泊園書院は開設200周年を迎えた。江戸時代後期の文政8年（1825）、四国高松藩の藤澤東暎が大阪に開塾してちょうど200年になるのである。同書院は東暎以降、藤澤南岳、黄鶴、黄坡、石濱純太郎の尽力により大阪最大の学問所として発展した。

泊園書院が東西学術研究所の母体となったこと、本学の中国学・東洋学のルーツをなしたことは周知のところであろうし、同書院を顕彰する泊園記念会も本研究所内に設けられている。

そこで泊園記念会は本学文学部と校友会、教育後援会の共催のもと、記念行事を開催することとした。

■10月24日（金）・25日（土）

シンポジウム「泊園書院から関西大学のルーツをひもとく」

会場：関西大学梅田キャンパス 8階
“KANDAI Me RISE ホール”

■10月20日（月）～11月15日（土）

記念特別展示

会場：関西大学千里山キャンパス
総合図書館 1階展示室

シンポジウム初日は泊園書院ビデオの初上映に始まり、高山大毅東大准教授の基調講演、藪田貫泊園記念会名誉会長との対談、山寺美紀子研究員による古琴の演奏、銘菓「南岳」の披露などを行ない、2日目は7名の研究者による最新の研究成果発表を企画している。

記念特別展示では泊園文庫所蔵の文献や印章など貴重資料の数々を展覧する予定である。ご期待いただきたい。

（東西学術研究所研究員・泊園記念会会長 吾妻 重二）



図書の出版

■ 関西大学東西学術研究所資料集刊29-4-1

藤澤南岳日記 一泊園書院資料集成 4-1一

吾妻 重二 編著 出版社：関西大学出版部

B5判上製／376頁／定価 8,910円（本体8,100円＋税）

ISBN 978-4-87354-797-8／分類コード C3095／刊行年月 2025年3月

藤澤南岳の日記を影印、翻刻。関西文芸・学術史第一級の資料

明治大正期における関西文壇の中心にして学問所「泊園書院」の主宰者藤澤南岳（1842-1920）の日記。その45年におよぶ漢文日記の全文を初めて公開する。自筆本の影印とともに翻刻を載せる。明治大正文化史・関西文芸史・日本漢学史の諸相を語る第一級の資料。第1回配本は明治8（1875）年から明治13（1880）年までを取める。



■ 関西大学東西学術研究所資料集刊27-13

家礼文献集成 日本篇 13

吾妻 重二 編著 出版社：関西大学出版部

B5判上製／272頁／定価 5,940円（本体5,400円＋税）

ISBN 978-4-87354-795-4／分類コード C3014／刊行年月 2025年3月

中村習斎『家礼講義』を影印。闇斎学派による研究の集大成

近世後期の尾張藩儒・中村習斎の『家礼講義』（道学資講本）を影印する。山崎闇斎に始まる崎門派の『朱子家礼』研究の掉尾を飾る集大成的著作。文献の博搜と引用の正確さに特色がある。『家礼文献集成 日本篇』シリーズの最終回配本。解説のほか、本シリーズ全13冊収載全文献一覧を付して便宜をはかった。



編 | 集 | 後 | 記

関西大学文化交渉学研究拠点ニューズレターNo.11をお届けする。同拠点リーダーである私はここ数年、小畑薫良（1888-1971）の足跡を調査している。彼は大阪豊中の漢学者、小畑萬次郎を父に持ち、アメリカ留学を経て外務省に入り翻訳官として活躍したが、中国の李白の詩の英訳（1922）や日本の『万葉集』（1940）の英訳などでも知られる。小畑は1941年日米開戦の詔書、および1945年の終戦の詔書の英訳を担当しており、さらに日本国憲法の制定にも参与、1951年のサンフランシスコ講和会議、1956年の日本国連加盟の国連会議にも出席した。この間、その卓越した英語の能力によって白洲次郎・重光葵らに篤く信頼された。実は白洲家も重光家も漢学者の家柄であり、彼ら三人は漢学という点でつながる。小畑の英語力の根底に漢学の素養があるからこそ、小畑は白洲・重光に重用されたのであろう。（長谷部 剛）

表紙上掲載写真：

【右上】 児島惟謙館 【左下】 千里山キャンパス 【中下】 高松塚古墳壁画再現展示室



発行：関西大学文化交渉学研究拠点

(Kansai University Institute for Cultural Interaction Studies)

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

TEL：06-6368-0653 FAX：06-6339-7721

E-mail：touzaiken@ml.kandai.jp

URL www.kansai-u.ac.jp/Tozaiken/

発行日：2025年（令和7年）9月